

南四国青銅器に関する二、三の問題

岡 本 健 児

Some Problems Concerning Bronze Implements in
the South Shikoku

Kenji OKAMOTO

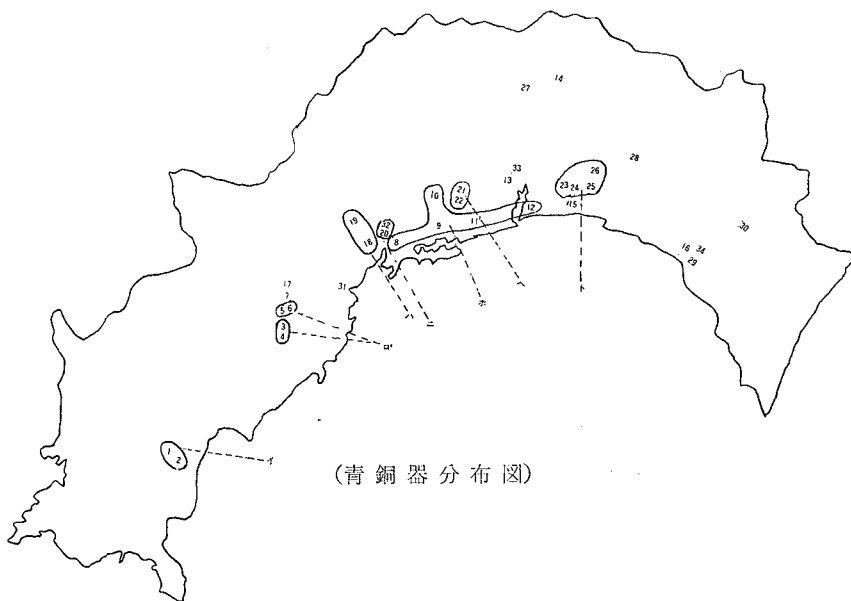
(昭和43年1月13日受理)

I は じ め に

本論考における南四国地方は、地理的に太平洋に面し、四国山地によって瀬戸内地方と隔離された地域をさす。それは行政的に、古くは土佐国であり、現在は高知県となっている。また日本考古学、とくに本論考で取りあつかっている弥生時代青銅器の分布上からは、その東部において銅鐸が発見され、西部に銅鈴・銅剣・銅戈が多く出土する地域であり、瀬戸内にだけ発見される広形銅剣のまったく発見されない地域をさしている。

筆者はこれまで南四国の考古学的研究に従事してきたのであるが、最近この地方の新しい青銅器資料が増加するにつれて、その分布に二、三の現象が存在するのではないかと考えられるようになった。ついに思い切って一つの論考としてまとめてみたのであるが、仮説であり、問題提起であるとしてこれを批判していただければ幸いである。この論考については、その続編というものも持っている。しかしこれを発表することは、本論考以上に勇気のいることであり、また現段階の日本考古学のらち外のものであるかもしれない。

なにはともあれ、本論考はあくまでも南四国に限定して論及したものである。そして以下述べるような青銅器の分布現象が、南四国以外の他の地域にみられるか、みられるなら



ばどのような形をとっているかを、今後追求したいと考えている。それを追求することによって、本論考の続編もまた勇気を必要とせず書けることにもなろうと思う。

本論考において南四国青銅器の分布の在り方から、二、三の問題提起をするのであるが、それにはまず資料としての南四国の青銅器の種類、新古それに出土地などを表示しなければならない。

II 資 料

南四国の弥生時代青銅器は銅銚・銅戈・銅剣・銅鐸であって、銅釦・銅鏃は見えていない。

銅 銚

南四国の青銅器のなかで、もっとも発見数が多い。出土したものと、古くより神社や個人宅に伝えられたものとを列挙しよう。神社や個人宅に伝えられたものは、その近在より出土し、神社や個人宅に収められたものがほとんどである。このことは銅銚にかぎらず、他の青銅器の場合も同様である。銅銚の型式分類として、細形・中細形・中広形・広形と4型式にわかったものを採用する。

1¹⁾ 中村市石丸

中広形銅銚が1本出土している。南四国の中広形銅銚では細い部類に属する。

2 中村市八東山路 宮崎嘉孝氏所蔵

中広形銅銚であるが、石丸出土のものに比較すると広形にちかいものである。山路の域跡から発見され、宮崎氏宅に保存されたものにちがいない。

3 高岡郡窪川町根々崎

中広形4本、広形1本、合計5本の出土遺跡である。出土は江戸時代であるが、出土地点は判明している。小山丘の裾より発見されていて、その出土地点の地理的環境は、次の作屋西の川遺跡の場合とまったく同一といってよい。

4 高岡郡窪川町作屋西の川

広形4本、中広形1本とが出土している。

5 高岡郡窪川町作屋ホコノコシ

森喜一氏が開墾中に鋤先にあてて発見したもので、中広形1本が出土している。出土地をホコノコシというのは偶然の一致であろうか。次のような伝説が残っている。

“ホコノコシ山にむかって右に神谷という所がある。その神谷の右の峯に神様がまつてあったという。その神様の跡は今も残っている。その神様が川向うの市生原のお宮（現在の薬師様）に迎えられ、上空を飛んでおいでの時、その途中で銚を落されたのでホコノコシという地名がついたという。”

6 高岡郡窪川町小野川 長崎南外史氏蔵

もと近くの神社にあったものを、長崎氏の蔵父がもらい受けられたものであるという。広形銅銚1本である。

7 高岡郡窪川町市生原 高加茂神社

高加茂神社の御神体として中広形銅銚6本がある。うち1本は袋部だけであるが、ほか

の5本は完全である。これらの銅鉾とともに銅戈が1本御神体として混在していたが、これについては後述する。6本の銅鉾は1括して付近より出土したものであろう。市生原の川むこうである上作屋松葉川中学校々庭より、神西式土器と石庖丁が出土していることなどはこれを物語っている。

8 須崎市多ノ郷飛田坂本1729番地

2本出土している。出土は明治17年であって、発見後須崎の古物商鍵本鉄平氏にゆずり渡しているので、その後のことは不明である。長さは1つが77.3cm、いま1本が84.8cmであるので、中広形か広形のいずれかであろう。

9 土佐市波介字東本村

2本出土している。中広形・広形各1本ずつである。

10 高岡郡日高村下分宮ノ内 小村神社

神宝として所蔵しているもの2本、ともに中広形である。

11 吾川郡春野村西畑フケ

ここでも2本出土している。1本は中広形、1本は広形である。

12 高知市三里池

2本とも中広形である。県内の銅鉾ではもっとも小さく質も良好のものである。長さ69cmで、環には穴がある。2本の銅鉾は同じ鋳型で作られているとみられる。

13 高知市久万 久万神社

現存しない。しかし江戸時代後期の書“探古録³⁾”に図示してある。これによれば広形とみられる。付近より出土したものを神社に寄進したものであろう。

14 長岡郡本山町北山瀬の上

1本出土している。広形銅鉾である。

15 南国市田村カリヤ

5本発見されていて、5本とも広形である。

16 安芸市川北江川

1本出土している。広形である。

以上南四国発見銅鉾総数38本である。

銅戈・銅剣

銅剣発見総数9本、銅戈総数4本である。(銅戈は1本がまだ行方不明である故4本とした)銅剣と銅戈は伴出したことがあるので本項で併せ述べる。型式としては銅鉾と同様に4型式にわかった。

○³⁾ 高岡郡窪川町市生原 高加茂神社

先述した銅鉾6本とともに御神体としてあったものである。中細形銅戈で樋に綾杉文があり、全長31.3cmのものである。

17 高岡郡窪川町米奥

最近岡内英吉氏によって発見されたもので、高加茂神社の御神体の銅鉾よりも短い。長さ27.4cmで、樋に綾杉文がある。もちろん中細形銅戈である。いま1本あったというが行方不明である。たぶん米奥のどこかで銅戈3本1括して出土し、1本は氏神である高加茂神社に寄進され、残り2本は発見者の手元におかれたと想像してよいだろう。

18 須崎市波介1121番地

中細形銅剣2本と中広形銅剣1本、計3本が丘陵上より出土している。すこし離れた谷を異にする同様の丘陵上(須崎市下郷増岡遺跡)からは、神西式土器片や敲石が多数発見されている。

19 高岡郡葉山村姫野々 三島神社及び白雲神社

三島神社の宝物として中細形銅剣が2本ある。これは江戸時代末期のこの地方の地主片岡成章氏の寄進によるものである。白雲神社には中広形銅剣が1本、これも宝物として伝えられていた。神社が火災にあった際、焼けたのであろうか真っ黒くこげている。この白雲神社が焼けた後に、再建に努力された人は先の三島神社の銅剣を寄進した片岡成章氏である⁴¹。この事実から考えて、白雲神社の銅剣も片岡成章氏の寄進でないかと推定される。

中細形銅剣2本と中広形銅剣1本が、姫野々のどこかで発見され、地主である片岡成章氏によって、それぞれ三島神社と白雲神社にわけて寄進されたのであろう。これら銅剣3本は最近盗難にあって現物はなくなった。

20 須崎市多ノ郷 賀茂神社

長さ2.4cmの関部に双孔のある中細形銅剣が1本、古くより神宝としてあった。これなども付近より発掘され、寄進されたものであろう。

21 吾川郡伊野町天神溝田

中細形銅剣1本と中広形銅戈1本とが伴出している。

22 吾川郡伊野町八田岩滝

中細形銅剣が1本出土している。長さ31.7cmで双孔のあるものである。

銅 鐸

南四国の東部に分布する。銅鐸の型式分類として三木文雄氏の分類法で記述する。

23 南国市大塚^{まで}町田

斜格子平帯縦横帯六区画文の銅鐸である。42cmの高さであり、5式の銅鐸とみられる。1個のみ出土している。南四国では古いタイプの銅鐸である。

24 南国市田村正善

三木文雄氏の型式分類でいくと5式と7式の間タイプ5-7式である。1個のみ出土している。距離にして400m離れたところに、田村カリヤ遺跡があって広形銅銚5本が出土している。

25 香美郡出土

香美郡下出土ということ以外はわかっていない。南四国では唯一つの流水文銅鐸である。出土はこれ1個である。横帯流水文銅鐸で2式である。南四国ではもっとも古いタイプの銅鐸である。

26 香美郡土佐山田町楠目談議所

1個で三木氏の7式の銅鐸が出土している。

27 土佐郡土佐村土居須磨山 琴平神社

御神体であって出土地不明、三木氏の分類では5-7式である。

28 香美町香北町垂生野大宮 美良布神社

2 個神宝として保存している。2 個とも 7 式である。“南路志⁵⁾”に
 “韭生郷大川上美良布社に降鐘と云物二ツ有、古へ五百蔵村へ天より降たと云……”
 とあるところから、筆者はこの 2 個の銅鐸は現在の香北町五百蔵より出土したものともた
 い。五百蔵の地形は銅鐸出土地としても、おかしくないところである。

29 安芸市伊尾木切畑

2 個 7 式の銅鐸が出土している。見晴しのよい台地より出土している。

30 安芸郡馬路村相名 熊野神社

熊野神社の御神体である。7 式のものが 1 個ある。付近から出土したものであろうか、
 土が銅鐸に付着している。

以上南四国において発見された銅鐸は 10 個である。また三木氏の銅鐸の型式は次のよう
 な先後関係が組み立てられる。

1 式→2 式→5 式→5—7 式→7 式

石 剣

青銅器ではないが、銅剣を模したと考えられる石剣が南四国に 4 例ある。これも青銅器
 の分布を考えるうえに関係があるので列举しておこう。

31 高岡郡中土佐町久礼

長さ 23cm、硬砂岩製の鉄剣形石剣が 1 本発見されている。単独出土である。

32 須崎市吾井郷山添御神母敷

現存部の長さ 18.4cm、粘板岩製で有樋式石剣である。中細形銅剣を模して作っている
 事は明確である。1 本出土している。

33 高知市北秦泉寺53番地

水田を宅地にする際に発見されたもので、有柄式石剣である。扁平片刃石斧も伴出して
 いる。粘板岩製で 1 本だけ出土している。

34 安芸市川北山田山6260

粘板岩製で有樋式石剣である。見晴しのよい小山丘上より単独に 1 本出土している。こ
 れも中細形銅剣を模したものである。

注

- 1) 各遺跡につけられた番号と挿図青銅器分布図の番号とは合致するようにつけられている。
- 2) 稲毛実・武藤平道：“土佐国探古録”
- 3) 番号をつければ銅鐸の項の 7 に編入されるし、発見を中心に考えれば 17 の米奥の銅戈とい
 っしょにしなければならぬので○印とした。
- 4) 白雲神社の文書による。
- 5) 武藤致和：“南路志 36 巻”

III 南四国青銅器の時期

以上概観してきた南四国の青銅器は、結論から先に出すことになるが、弥生時代も後期
 にかぎられるようである。筆者は南四国の次の如き遺跡の示す時期から以上のような結論
 に達したのである。

a 中村市石丸遺跡の場合

昭和26年中筋川の堤防工事の時、中広形銅鉾が1本発見されている。銅鉾は深さ約1.5mの暗緑色の粘土層から出土し、また銅鉾出土地点より50mほど離れた付近には弥生式土器の包含層があって、銅鉾出土の地層と同一の深さから一群の弥生式土器が発見されている。この弥生式土器は後期前半の神西式土器であった。

b 高岡郡窪川町作屋西の川遺跡の場合

西の川では50mの距離で、弥生後期前半の住居遺跡と銅鉾出土地とが発見されている。昭和10年西の川の丘陵の裾より、銅鉾5本が発見され、昭和32年にはそれより50m離れた水田中より、神西式土器と石庖丁とが発見されている。この両者はその位置からみて同時期の、そして関係あるものとみななければならない。

c 吾川郡伊野町天神遺跡の場合

仁淀川の支流宇治川の治水工事作業中、地下2.5～3mの深さから銅剣・銅戈が出土した。その地点から50m下流の川床面から、弥生後期後半の土器（住吉式土器）を包含する炉跡が三カ所発見された。この遺跡の銅剣・銅戈と炉跡より出土した弥生式土器とは、その位置から同一の時期に埋没したものとみてよいだろう。その場合銅剣・銅戈の製作年代はそれよりも古く考えられるのは当然である。

d 南国市田村カリヤ遺跡の場合

地下約30cmの土中から5本の銅鉾が発見されている。この銅鉾とともに赤色の素焼形土器と、ほかに多くの土器片も出土している。これらの土器は無文であったという。筆者の推測するところでは、土器は後期のそれも無文であるところから後半の住吉式土器でないかと考えられる。

以上4例の青銅利器に伴出した弥生式土器をみてきたのであるが、それらはすべて弥生後期の土器のみである。この土器伴出の4例を基礎として、南四国の青銅器使用、さらに埋蔵の時期を明確にしてみよう。

まず中村市石丸遺跡例から中広形銅鉾は、弥生後期前半に使用され、埋蔵されたとみてよい。そして窪川町作屋西の川遺跡例から中広形及び広形銅鉾のセットは、同じ弥生後期前半に使用され、かつ埋蔵されたとしなければならない。

以上の2例の存在と、これらの銅鉾がわが国で製造した（日本製青銅器は弥生後期以後の製作であることは後述する）ものである理由から、中広形銅鉾も広形銅鉾も南四国での出現を弥生後期前半と考えたい。ではそれらの銅鉾よりも青銅器の型式として古いとみられている中細形銅戈及び中細形銅剣の出現の時期はどうであろうか。この結論を与える資料は南四国ではまだ発見されていない。よってこれについては、北九州の青銅器の研究結果を借りなければならない。杉原莊介博士はこれに関して次のように述べていられる。

“金属器については、中期において鉄器の外に初めて青銅器が用いられたが、それらはすべて朝鮮製か中国製のもので、大陸から輸入されたものであった。すなわち、青銅器に関しては、弥生時代の中期まで、日本でこれを製造したという確証がないのである。しかしこの時期を迎えて、初めて日本でも青銅器を鑄造するようになった。それは北九州地方の甕棺墓の副葬品として発見される巴形銅器や有鉤銅釦は、大陸において全くその例を見ないものであり、ことに有鉤銅釦に関しては、日本において鑄型が発見されていて、これを証している。これらは族長の宝器として役立たされている。つぎに古くから弥生時代の

遺品といわれてきた、日本製であることの明らかな銅鐸や銅剣・銅鉾・銅戈などの銅利器も、これによって後期の所産と考える。……¹⁾”

杉原博士の観点に立つと、南四国に発見されている中細形銅戈や銅剣は、確実に日本製であるところから弥生後期初頭に鑄造されたものとなる。そしてそれらは北九州あたりより南四国にもたらされたものであろう。よって中細形銅戈・中細形銅剣の南四国における出現は、中広形銅鉾・広形銅鉾と同様に弥生後期前半となる。しかし弥生後期前半といっても、土器型式による時期区分であるので、その時期は50～100年の幅があるとみる。その期間において型式的に古い中細形銅戈・中細形銅剣が、中広形銅鉾や広形銅鉾に先行して南四国にもたらされたと考えるべきであろう。

次に銅鐸についての年代は、銅剣との伴出例（南四国以外の）からさぐらなくてはならない。香川県安田・徳島県源田両遺跡からは、中広形銅剣と三木氏のいわれる5式銅鐸が伴出している。また2式の直前型式である1式銅鐸（南四国未発見）は、広島県福田遺跡において中細形銅剣と伴出している。南四国出土の銅鐸は2式以降のものであり、また以上の銅剣伴出例からして、南四国の銅鐸は中細形銅剣出現以後のものと言ってよいだろう。そして中細形銅剣以後ということになれば、弥生後期前半に南四国に出現したということにもなるのである。

以上述べたところは南四国における青銅器の出現の時期であったが、これらの青銅器類は伝世せられ、祭器として使用され、そして埋蔵されるのであるが、その埋蔵される時期が弥生後期前半よりくだる場合が存在するのは当然である。吾川郡伊野町天神溝田遺跡のごとき場合がある。出土した青銅器は中細形銅剣と中広形銅戈とであるが、これが埋蔵された時期は、近くの住居跡の土器がしめす弥生後期後半であったろう。南国市田村カリヤの広形銅鉾5本も伴出の土器から同様に弥生後期後半となろう。

結局南四国では、すべての青銅器が弥生後期前半にでそい、さらに埋蔵されるのは、後期前半から後半にかけてということになるのではなかろうか。

注

1) 杉原荘介：日本農耕文化の生成の研究 明治大学人文科学研究紀要2（1963）30頁。

IV 南四国における青銅器の移入とその地域的差異

南四国の青銅器は、その種類・型式の如何を問わず、現段階の研究から共同体の祭器ということになろう。そしてその出現—先進地よりの移入—は、前項において論じたごとく弥生後期前半である。さてここで南四国における青銅器の出現の先後関係を、いまずこし詳細に知ることはできないであろうか。

これについて筆者は、伴出の土器によっての立論はでき難いが、青銅器そのものの型式論から、その出現の先後関係はある程度論ぜられるのではないかと考えている。弥生後期前半という時期は、1つの型式の土器を基準にして定められたものであって、先述したように期間として50～100年を一応考えてよい。この期間につきつぎと型式の異った青銅器類が南四国に出現したのであろう。弥生後期前半のなかで、まず最初に南四国に姿をあらわしたのは、青銅器の型式論から、大陸のものに近い中細形銅剣（須崎市賀茂神社・伊野

町八田)・中細形銅戈(窪川町米奥)、そして南四国の銅鐸ではもっとも古い2式の銅鐸(香美郡下)であろう。

次には中細形銅剣と中広形銅剣の組み合わせたもの、中細形銅剣と中広形銅戈の組み合わせたもの¹⁾、そして中広形銅鉾だけのもの、銅鐸では5式がそうである。

さらに第3の段階は中広形銅鉾と広形銅鉾の組み合わせたもの²⁾、広形銅鉾だけのもの、銅鐸では5—7式及び7式のものということになる。このように3段階に南四国の青銅器をわけることには、研究者の多くには異論がないのではなからうか³⁾。

この3つの段階は南四国の弥生後期前半における青銅器出現の変遷である。ゆえに第1段階は後期前半の初頭に、そして第2の段階はその中葉に、第3の段階は後期前半の終末にということになるのではなからうか。そしてそれらは、まもなく埋蔵されたものもあり、後期後半までに伝世され、その時期に埋蔵されたものもあったろう。何がゆえに埋蔵の時期を異にしたかは、他日これを論じたい。

南四国の青銅器の出現の時期を、このように3つの段階にわけることによって、また次のような現象が存在するのに気づく。それは第1の段階の青銅器が、高知県の中央部の平野にはほとんど集中していることである。またこの段階の青銅器が高知平野以西では銅剣、高知平野以東では銅鐸に限定されることである。このように青銅器が南四国にもたらされた第1の段階に、中央部の平野にのみそれがみられるのは、これらの青銅器が南四国では、もっとも生産力を持つ平野部の共同体によって、はじめて入手できた事情を物語るものであろう。

この場合窪川町米奥発見の銅戈については、同じような考え方が通らない。もちろんこの銅戈も中細形銅戈であるので、この第1の段階に南四国にもたらされた青銅器の1つと考えてよからう⁴⁾。しかし窪川町付近は、南四国では山間部の盆地で、高知の中央部の平野とはいえない。この矛盾を筆者は独断であるかも知れないが次のように考えている。1つは窪川町付近の弥生時代の集落が、九州から南四国に銅鉾・銅戈類を移入するについて、中継的な役割を演じていたこと、それがゆえに特別に第1段階から第3段階までの青銅利器が多量に発見される地域になっているのであろう。窪川町内発見の銅鉾・銅戈は今までで総計21本で、高知県内発見の銅鉾・銅戈総数42本のなかばである。これはこのことを裏付けることにもなる。

第2段階の南四国の青銅器はやはり高知県の中央部の平野が、その分布の中心である。それに加えて中村平野がこれに加わってくる⁵⁾。いわば生産力の強い平野部にかぎられている。

それが第3段階になると、平野部はもちろんのこと山間部の小平野部にも青銅器が出現してくる。これはこの段階にほとんどすべての共同体が、祭器としての青銅器を獲得したことを示すものである。そしてそれはたぶん弥生後期前半の終りごろであろう。

注

- 1) 中細形銅剣と中広形銅剣または中広形銅戈の組み合わせたものは、厳密にいうと、九州などの先進地域から移入される当時は組み合わせていなかったかも知れない。たとえば先に中細形が移入され、後に中広形が移入され、しかる後に組み合わせたかも知れない。しかしこの点については考古学の限界で知る由もない。ゆえに一応組み合わせた時点で考えたわけである。

- 2) 中広形銅銚と広形銅銚の組み合わせたものであるが、考え方は注1と同様である。
- 3) 近く出版される“高知県史考古編”ではもっと細分している。しかし本論考のように3段階にわけるのが、無難なわけ方であろう。
- 4) 窪川町発見の中細形銅戈と市生原の中広形銅銚6本が、伴出したと考えられてもこれに反対する証拠はない。もし伴出したとなると、これは第2段階になる。
- 5) 中村平野における弥生文化の成立は、高知県中央部より早かったが、弥生中期以降はふるわなくなり、県中央部に文化的に追いつかれる傾向にある。

V 南四国青銅器分布に関する一試案

南四国青銅器の分布図をみていると、いま一つ注目すべき現象に気付く。それは隣りあった青銅器出土地の青銅器の種類が同一であり、それにその出土数が同じであり、なかには出土の青銅器の組み合わせまでがまったく同一の場合が存することである。具体的に説明しよう。

イ 中村平野における銅銚1本…石丸遺跡と山路

ロ 窪川台地における銅銚5本…根々崎遺跡と作屋西の川遺跡、この両遺跡の距離は直線で約5km、なお窪川台地には銅銚1本の隣りあわせもある。(ホコノコシと長崎氏所蔵のもの)

ハ 新莊川沿岸の銅剣3本…須崎市波介遺跡と葉山村の銅剣、これは中細形2本と中広形1本の組み合わせまで同一である。

ニ 須崎平野西部の銅剣(石剣)1本…多の郷賀茂神社の中細形銅剣とそれを模した吾井郷出土の有樋式石剣1本

ホ 須崎市より高知市にいたる太平洋沿岸部の銅銚2本…須崎市飛田坂本遺跡・土佐市波介遺跡・春野村西畑遺跡そして高知市三里遺跡、すべて出土遺跡で2本の銅銚を出土している。それに所蔵品である日高村小村神社の2本の銅銚もこれに入れてよい。須崎市飛田遺跡から三里遺跡まで直線距離で35kmほどである。

ヘ 伊野町の中細形銅剣1本…伊野町天神と八田のもの、ただし天神からは中広形銅戈が伴出している。この点が他の地区のものに比較すると資料として弱い。

ト 香長平野における銅鐸1個…香美郡下出土の流水文2式銅鐸のもの、それに南国市大桶遺跡、田村正善遺跡、楠目談議所遺跡を挙げることができる。

以上具体的に説明すると7～8のグループにわけることができるが、これらのグループに入らないものが存在する。これらはどちらかというとな四国でも東部にかたよっていること、そして銅鐸も出土しているが、同じ地域に銅銚も出土しているという地域のような。具体例を挙げると、南国市田村カリヤの銅銚5本、安芸平野の川北の有樋式石剣、伊尾木の銅鐸そして川北江川の銅銚がある。さらに吉野川流域の本山の銅銚と土佐村の銅鐸がある。これらは地域的にみると、香長平野、安芸平野そして吉野川流域と三つに分けられる。また以上の銅銚・銅鐸の3接触地区に入らないものが1～2存在する。これについては付近における青銅器の未発見、所蔵品であれば後世における遠隔地よりの移動も、一応考慮に入れてよいであろう。

さて先述した7～8の青銅器の種類と個数を同じくする、そして地域的に相接するとい

う条件下にあるところのこの現象は偶然に起ったのであろうか。偶然にしては確然としすぎているようである。筆者はこの現象を次のように考えている。

a 先述したイ～ニまでとへの例の如く、相接する青銅器出土遺跡より発見された青銅器（ある場合は青銅利器とそれを模した石剣の場合もある）が、同じ種類のもので、同時にその個数も同じ場合は、分村による共同体の地域的拡充の姿を示しているのではないかと考える。南四国の弥生後期前半は、遺跡の爆発的に増加する時期であり、分村がおこなわれ人口が増加したと考えられている点からも考慮して誤りない。

b ホ、トの如く数カ所の同一の青銅器、そして個数を同じくする現象は、共同体の連合を意味するものでないだろうか。そしてこの地方の部族国家成立の直前の共同体の姿を示すものと解釈したい。

c 南四国東部のように、銅鐸と銅利器が混在する地域において、a、bにみられるような現象のみられないのは、銅鐸と銅利器—祭器の差異—による共同体の不統合があったからでなかろうか。共同体の不統合は、ある場合には戦いという手段もとられたであろう。

さて以上のa、b、cのうちbのような共同体の連合を意味する青銅器の分布を示す地域が、南四国の中央部にみられるのは、これまた偶然でなく、その地域の農業生産力にうらづけられた南四国での先進的現象であろう。これに対して、西部地域及び東部地域はその一段階前の分村による共同体の地域的拡充と、また共同体の不統合という姿を表現していることも注目すべきことである。

(高知女子大学 歴史学研究室)